

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 28日現在

機関番号：	34301
研究種目：	研究活動スタート支援
研究期間：	2010～2011
課題番号：	22830109
研究課題名（和文）	貧困に対する活動と社会的レジリエンスの社会学的研究 —シカゴ学派からの展開と実践
研究課題名（英文）	Sociological Study on Anti-Poverty Activities and Social Resilience: Developments and Practices of the Chicago School
研究代表者	
	西川 知亨（NISHIKAWA TOMOYUKI）
	大谷大学・文学部・講師
	研究者番号：50582920

## 研究成果の概要（和文）：

主に日本の「貧困」／貧困層とその支援に関する全国の活動の調査を進めるなかで、貧困に対抗する活動が社会的レジリエンスに及ぼす影響についての検討をおこなった。同時に、これらの調査を理論的・方法論的に裏付ける初期シカゴ学派の「総合的社会認識」の社会学の検討を進め、活用した。その結果、「柔軟な役割関係は、社会的レジリエンスを高める可能性を有する」など、社会的レジリエンスに関する命題をいくつか得た。

## 研究成果の概要（英文）：

Through an investigation into poverty and anti-poverty activities in contemporary Japan, I discussed their impact of on social resilience. As a methodology, I pursued the idea of a “synthesizing approach”, which is derived from the early Chicago School of Sociology, in order to support the discussion theoretically and methodologically. In conclusion, I derived some propositions, such as “Flexible role relationships have the possibility to enhance social resilience”.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,240,000	372,000	1,612,000
2011年度	1,140,000	342,000	1,482,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,380,000	714,000	3,094,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード： 貧困、レジリエンス、シカゴ学派、社会学史、社会問題、人間生態学、総合的社会認識、居場所

## 1. 研究開始当初の背景

2008年に起こった世界的な金融危機・経済危機は、わが国でも「貧困」を可視化させる

こととなった。「貧困」が原因で、健全な社会生活を送ることが困難になったり、また北九州市、桑名市の「餓死」事件に象徴されるように、命を落とした人も少なくない。わが国日本において、貧困による「社会的人間としての存在状態」の危機、あるいは「生命」の危機をいかにして回避していくかは、社会学のみならず日本社会にとって喫緊の課題である。

他方、社会諸科学において、「貧困」にともなう諸問題や社会再編に関して幾多の研究が蓄積されている。だが、貧困のために生活解体・社会解体を引き起こす条件、さらには再組織化を促す条件というきわめて社会的かつ社会的な課題を、時間と空間、質と量などの側面から、総合的に把握しようとした調査研究については、アメリカ社会学における初期シカゴ学派の一連のモノグラフ研究（アンダーソン、フレイジア、ワースらに代表される貧困研究）以外には、あまり蓄積がない。そもそも、新しい社会的レジリエンスを提供すると期待できる、近年の反貧困活動の学術的研究は、研究代表者の最近の研究を除いては、ほとんどなされていないという状況にある。

以上のように、社会的・学術的要請が高いはずであるにもかかわらず、社会科学／社会学のなかで学問領域が分断されている傾向を一因として、打開策を見出せないでいる状況を改善するために、社会学説史研究で得た知見を、具体的なデータの実証的調査・分析に活用するべく、研究代表者は本研究を構想した。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、＜貧困層＞と＜その支援活動の社会的影響＞について、学術的考察をおこなうことにある。具体的には、貧困の予防／脱却に向けた「新しい福祉」として豊穡な可能性を含んでいる内外の「反貧困」(anti-poverty) 活動が、社会的レジリエンスにどのように影響を及ぼしているのかを明らかにする。「レジリエンス」とは、困難な状況から柔軟に立ち直る（生活を再組織化）する回復力・弾性力のことを指し、「社会的レジリエンス」とは、個人だけでなく、社会的に資源を組織化して困難な社会的状況を乗り越えていく回復力・弾性力のことを指し示す。

研究対象となる主なフィールドは、第1に、2008年以降現在までの雇い止め数ワースト1であり、日本社会史上、「貧困」に関する象徴的な事例となっている愛知県名古屋地区～三河地区である。第2に、反貧困活動と大学やNPO・NGOとの連携の仕方に特徴が

ある京都市およびその周辺地区である。第3に、その他、関東、東北、北陸など全国の反貧困活動の取り組みの現場である。第4に、大学とNPO・NGO、Community Organizerらが連携して貧困問題に取り組んでいる好例として、日本の反貧困活動がしばしば参照事例としている、米国カリフォルニア州ロスアンゼルス～サンディエゴ地域である。研究方法としては、研究代表者が社会学的方法論上の意義を見出してきたシカゴ学派の総合的社会認識にもとづく技法を活用する。国家・行政や市場社会とは違う形で社会的レジリエンスを育み、新しい福祉の供給源として注目しうる「対抗的公共圏」としての反貧困／「派遣村」活動の調査を通して、緊急性の高い「貧困」問題の社会学的研究を遂行するものである。

## 3. 研究の方法

本研究は、先の目的遂行のために示した研究概要に即して、研究対象・フィールドとしては、愛知（愛知派遣村実行委員会・反貧困ネットワークあいち）・京都（反貧困ネットワーク京都・各NPO団体）・カリフォルニア州の貧困に対する活動の取り組み、および国内の反貧困・「派遣村」活動が選ばれた。方法として、フィールドワーク・参与観察をとともなうインタビュー調査、関係各地における文献資料調査、さらには反貧困活動の各種相談会における相談票の質的・計量的調査、マッピングの方法を採用することを試みた。シカゴ学派の総合的社会認識の方法に基づき、各種データを単なる折衷(eclectic)ではない、三角測量(triangulation)と絡み合わせ(entanglement)により分析することを目指した。

## 4. 研究成果

日本の「貧困」／貧困層とその支援に関する全国の活動（関西、東海、北陸、関東、東北地方など）、および比較調査のための米国カリフォルニア州の調査を進めるなかで、貧困に対抗する活動が社会的レジリエンスに及ぼす影響についての考察と論点の整理をおこなった。同時に、これらの調査を理論的・方法論的に裏付ける初期シカゴ学派の「総合的社会認識」の社会学の検討を進め、活用を構想することで、日本における、専門家／「当事者」双方の意欲・意図が交錯した「生態学的」活動の様相について解明することを試みた。

その結果として得た社会的レジリエンスの

諸命題は、以下のようなものである。

(1) 生活の再組織化のためには、社会資源だけでなく、個人の資質も、資源として利用可能である。

流動化・不安定化した現代社会においては、誰しもが生活解体に陥る可能性がある、と認識されている。しかし、個々の条件に大きな違いはあれ、生活解体の状態に陥ったとしても、再組織化を容易にするための活動やトレーニングもまた、誰でもできる可能性がある。つまりそれは、日々の生活のなかで、各自および社会のレジリエンスを高めていく社会的行為・活動である。それらを容易にするためには、フォーマル／インフォーマルなレベルでの多元的な社会の仕組みづくりも必要となってくる。

(2) 社会的レジリエンスは、個人的レジリエンスと不可分の関係にある。

かつて初期シカゴ学派のトマスが論じたように、社会解体と生活解体は別のものであるにもかかわらず、密接な関係性を持っている。個人の資質などは、社会制度をはじめとして、さまざまな社会資源によって蓄積することができる可能性も大きい。

(3) 社会的レジリエンスは、社会保障やネットワークだけでなく社会意識もかかわる。

ネットワークが、行政などの権力者の責任放棄のために利用されることはよく指摘されているが、貧困に対する自己責任観を反貧困活動が是正しようとしていることをはじめとして、問題状況に対する社会的反作用のあり方も、社会的レジリエンスに大きな影響を及ぼす。

(4) 柔軟な役割関係は、社会的レジリエンスを高める可能性を有する。

たとえば「派遣村」活動では、相談者が次の日にはスタッフとなる、あるいは相談員を含むスタッフと懇親会を共にする、などといったことが見られるなど、相談者と相談に応じる者との間に明確な「線引き」がなされていない。誰しも「貧困」状況に追い込まれる可能性がある、という意識が、相談に応じる者たちの中で共有されているように見える。

1960年代の社会運動は、しばしば固い連

帯に基づいていたが、現在の反貧困活動で重視されるのは、レジリエントなネットワークである。この柔軟性は、支援する者／支援される者 の関係性が流動的であり、その流動性こそが、(社会参画、居場所づくりを可能にするという意味で) 社会的レジリエンスを生み出している可能性がある。柔軟性が、社会関係を創出させる。

(5) 社会的レジリエンスは、リジッドな社会的組織化とは異なる「包摂」を可能にする。

初期シカゴ学派の社会的組織化論では、一致団結したコミュニティの組織化による逸脱の抑止という側面が、色濃く提示されているように見える。社会的組織化論の生態学観を修正・活用し、先にあげた役割の柔軟性など、レジリエントな社会生態観は、現在各地でとりおこなわれている社会的包摂プロジェクトなどをはじめとして、柔軟に社会を組織化していく視点を提供する。

(6) 専門家間の相互作用が、総合的な問題解決を可能にする可能性がある。

シカゴ学派の職業・プロフェッション研究に対する批判的視点が参考になる。シカゴ学派は、社会の底辺層の生態学的研究で知られると同時に、プロの専門家の研究も行ってきた伝統がある。だが、初期バージェスのソーシャル・サーベイ運動の議論などを除き、異業種の専門家同士の相互作用が、社会的組織化にもたらす影響力については、それほど重視してこなかったように思われる。

派遣村・反貧困系の相談会のブースの例としては、「労働」「住まい」「生活」「多重債務」「健康」がある。これらのブースでは、弁護士、司法書士などの法律家だけでなく、社会保険労務士、社会福祉士、精神保健福祉士、看護師、労働相談員、各領域の研究者などが、相談を担当している。諸専門領域を融合させることで、総合的に個人の問題を解決させた例は少くない。

(7) 前命題にかかわらず、社会的レジリエンスの担い手は、専門家だけではない。

現代のボランティア、とくにこの文脈では、「プロボノ」(専門知識を生かしたボランティア) 論批判の視点が参考になる。

プロボノ論においては、専門性を過度に強調するあまり、非専門家の役割について多くの場合看過している。しかし、本研究において、反貧困活動をはじめとして、全国の貧困に対抗する活動を調査してきた結果、専門家と非専門家などの「当事者」に役割の柔軟性（転回を想定）が、個々の人々の生活および制度の組織化に寄与する可能性が明らかとなっている。

(8) 社会的レジリエンスは、モデル（メンター）／ファシリテーター／キーパーソンを示すことにより獲得されることがある。

反貧困活動の担い手は、キーパーソンなどという言葉で、重要な人物との社会的絆をとりむすぶことの有用性を主張することがあるが、実際に、レジリエントな生活の組織化に寄与する例は少なくない。ここでのキーパーソンは、必ずしも年上の者というわけではない。

(9) 社会的レジリエンスは、対抗的な関係をとることで、促進される場合もある。

活動の展開が部分的であれ、社会的レジリエンスを高めるとすれば、行政や市場社会らと対抗的な関係をとることで、対抗的な公共圏としての反貧困活動は、システムとして作動し始める。つまり、協同の前段階として、対抗的な関係をとることが、システムを立ち上げる契機となることがある。これは言うまでもなく、ジンメルやウェーバーが論じた側面である。

(10) 諸圏域の関係性を見てみると、ネットワークだけでなく、社会保障も社会的レジリエンスにとって重要である。

先にも述べたように、貧困の問題は、「共助の問題」として、権力者によって利用される（たとえば行政の責任放棄）ことも常に問題化される。ネットワークや「居場所」概念だけでは、親密圏の構築のみならず社会的レジリエンスも、効果的には促進されない。ネットワーク化がいかに豊饒なものになったとしても、「生の元本保証」（湯浅）は欠くことができない。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- ① 西川知亨, 2012, 「現代日本における反貧困活動の展開——時空間の人間生態学」『フォーラム現代社会学』第11号, 関西社会学会, 41-53頁. (査読有)
- ② 西川知亨, 2011, 「何もない人ほど」『反貧困ネットワーク京都ニュースレター』第2号, 9-10頁. (査読無)
- ③ Nishikawa, Tomoyuki, 2011, “Pauvrete relationnelle et resilience sociale dans le Japon contemporain,” *Informations sociales*, 168, Caisse nationale des Allocations familiales, 96-102. (査読有)
- ④ 西川知亨, 2011, 「出前授業「社会へ巣立つ前、働く前に知っておきたいこと——さまざまな雇用の広がり」と求人票の読み方」を開催して」『あつたか情報』第27号（特定非営利活動法人あつたかサポート）, 7-8頁. (査読無)
- ⑤ 西川知亨, 2011, 「個人研究 貧困に対する活動と社会的レジリエンスの社会的学的研究—シカゴ学派からの展開と実践」『研究所報』第59号（大谷大学真宗総合研究所）, 31頁. (査読無)
- ⑥ 西川知亨, 2011, 「反貧困世直し大集会（in 東京）への参加」『反貧困ネットワーク京都ニュースレター』第1号（反貧困ネットワーク京都・つくし法律事務所）, 6頁. (査読無)

〔学会発表〕（計3件）

- ① Nishikawa, Tomoyuki, 2012, “Anti-Poverty Activities in Contemporary Japan: Human Ecology in Time and Space” (Session: Families and the Frayed Safety Net: Navigating the Economic Downturn) 83rd Annual Meeting of the Pacific Sociological Association (Intersectionalities and Inequalities: Knowledge and Power for the 21<sup>st</sup> Century), San Diego, California: March 22, 2012. (査読有)
- ② 西川知亨, 2012, 「反貧困の生態学——シカゴ学派社会学から現代日本の社会問題へ」 「社会統合のグランドデザインの構想」プロジェクト講演会（世話人：廳茂）, 神戸大学国際文化学部, 2012年2月4日【招待講演】. (査読無)
- ③ 西川知亨, 「現代日本における反貧困活

動の展開——初期シカゴ学派の人間生態学／総合的社会認識の視点から」第 84 回日本社会学会大会（於 関西大学），2011 年 9 月 17 日。（査読有（ゆるやかなセレクション））

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

西川 知亨 (NISHIKAWA TOMOYUKI)

大谷大学・文学部・講師

研究者番号：50582920